降り注ぐ千の甘いキスが、
二人の時間を狂わせる。

初めてその唇に触れたとき、ツバサの頭の中に浮かんだのは、あ、柔らかい、というごくありふれた言葉だった。
自分にもっと語彙やセンスがあれば、こんなとき詩的な単語の一つでも思い浮かぶのだろうか、と内心で気落ちする。
最近は自分たちで作詞をするスクールアイドルも増えていると聞く。
そう言えばこの子たちも、メンバーの一人が作詞を手がけていたな、と思い出しながら、ツバサはうっすらと目を開いた。
眉間に幾本ものしわを寄せ、固く固く閉じられた瞼が視界に写る。
よほどきつく閉じているのか、きれいに整えられた睫毛がわずかに震えていた。
あら、とツバサが意外そうな表情を浮かべる。
スクールアイドルにとって、身なりに気を使うのは当然のことだ。学生である以上あまり濃い化粧などはできないが、それでも眉毛を切り揃えるくらいのことは誰でも普通にやっている。
ただ、睫毛までそれなりに手入れしている子となるとそれほど多くは見かけない。ツバサ自身も、ステージに立つ日の朝に確認する程度だった。
この子もどちらかと言えばそこまで細かいことは気にしないタイプかと思っていたけど、と考えてツバサははた、と気づく。
もしかしたら、メンバーの誰かにそのあたりまでしっかりチェックする子がいるのだろうか。
あれだけ個性的な娘が九人も集まっているのだ。一人くらいそういう子がいても不思議ではない。
その子に指摘されているうちに、自分でもごく自然に気を使うようになったのか。
それとも――メンバーの誰かが、毎朝必ず、確認しているのだろうか。
この子の姿を、隅から隅まで。
ツバサの手に、かすかに力が入る。
それを敏感に察したのか、一瞬身体が強張ったのを感じ取って、しまった、と思いながらツバサは唇を離した。
舌先で、濡れた唇を舐め取る。
「ふふ、高坂さん、緊張しすぎ」
ツバサに声をかけられて、穂乃果はおそるおそる、といった様子で瞼を開いた。
「ん……ぁ」
その口から漏れ出した甘い吐息に、ツバサは心臓が大きく跳ねるのを感じたが、しかしそれを気取られてはいけないと必死に平静を装う。
「ちょっとキスしただけなのに。挨拶みたいなものよ」

「え、あ、あの、だって、わたし……その」
手の甲で口元を拭いながら、ベンチに下ろした腰を落ち着かない様子でもじもじと揺すりつつ、穂乃果が視線を落とす。
「あら、嫌いだった？　キス」
「いえ、嫌い、とかじゃなくて、わたし、まだ、あの」
穂乃果が口ごもる。
それ以上言葉を継げない穂乃果に、ツバサは身をかがめて、穂乃果の顔をのぞき込むようにして問いかけた。
「もしかして……初めてだった？」
ツバサの問い、その初めて、という単語に反応して、穂乃果が身を縮込める。
「は、はい……」
朱色に染まっていた頬をさらに赤くして、消え入るような声で穂乃果がうなずく。
「そっか、高坂さんのファーストキス、いただいちゃったのね」
自身の唇をもう一度舌先でなぞるように撫でながら、ツバサが穂乃果の隣に並ぶようにしてベンチに座る。
気づけば、いつの間にか日は西に大きく傾いていて、空は黄昏の色に染まりつつあった。
これから、秋葉原の表通りは学校や仕事帰りの人々で賑わうのだろう。
そんな表の喧噪からはやや外れた場所、ここ何年かで次々と建てられた近代的なビルの陰に隠れた、雑居ビルと古くからの住宅が建ち並ぶ一角にある小さな公園。
人の通りもほとんど無く、まるで時間の流れから取り残されてしまったかのようなその場所は、ツバサのお気に入りだった。
目を閉じ、耳をすませても、聞こえてくるのはわずかばかりの生活音と、風に擦れる木々の葉音だけ。
一人になりたいとき、ツバサはよくここに来ていた。
A-RISE の仲間たちにも教えていない、ツバサだけの秘密の場所――だった。今日、穂乃果をつれてくるまでは。
もともと、秘密にしておくことにそれほどこだわりがあったわけではない。ただわざわざ誰かを案内してくるような場所でもなかったから、結果的にそうなってしまっていただけだ。
「……けど、これからは本当に内緒にしておこうかな」
ツバサがつぶやく。
「え？」
「誰にも教えない、私と高坂さんだけの秘密、ってことで」
いたずらっぽく微笑むツバサ。
「あ……はい、それがいいと、思い……ます」
あきらかに場所のことではないと勘違いしているであろう穂乃果の返事に、

「あら？　誰か知られると困る相手でもいるの？」
と興味深そうにツバサが穂乃果を見上げる。
「ち、違います！　そうじゃなくて、ツバサさんに迷惑がかかると思って」
「迷惑？　迷惑って？」
「その、ツバサさんは、というかA-RISEはみんなの憧れのスクールアイドルだし、そんな人がわたしなんかと、あの、キ、キスしたなんて知られたら」
「ふふ、私はべつに構わないわよ？　だって私からしたことなんだし」
穂乃果の髪を指先に絡めながら、ツバサが穂乃果の頬に手をあてる。
「よかったら、もう一度キス……してみる？」
そう穂乃果の耳元で囁いて、そのままツバサが顔を寄せる。
そして、その唇が再び穂乃果の唇に重なる、その寸前で。
「ご、ごめんなさい！」
ツバサの身体を両手で押しのけて、穂乃果は跳ねるように立ち上がった。
「え、あの、高坂さん？」
「きょ、きょ、今日は失礼します！」
不意をつかれて呆然とするツバサの顔を見ることもなく、穂乃果は腰を直角近くまで曲げて会釈すると、足下に置いてあった鞄を抱えて走りだした。
「あらら……」
その背中を見送りながら、ツバサが息をつく。
そのまま一目散に走り去ろうとする穂乃果だったが、その姿が建物の陰に隠れる寸前で、わずかに足が緩んだ。
首だけで、そっとツバサに振り返る。
それに気づいて手を振ったツバサだったが、しかし穂乃果はそれに反応することもなくまたすぐに前を向くと、住宅街の奥へと消えていった。
それを見届け、穂乃果の背中が見えなくなったとたん、
「……はぁ」
膝から力が抜けたかのように、ツバサがベンチに腰を落とす。
「って、ああもう、なんてことしてるのよ私は！」
やっちゃった。
やっちゃったやっちゃったやっちゃった――！
がっくりと肩を落としながら、ツバサが頭を抱えこむ。
どうしよう。
いきなりキスなんて、それも初めてだったなんて。
「嫌われたわよね……嫌われちゃったわよね……」
ああああああ、と肺から空気が抜けていくかのような声をあげてツバサが身悶える。
「ああ、私のばかー！」